

イースター礼拝 マタイ 28 章 1-10 節 「復活の朝」

イースターおめでとうございます。イースターは教会の基盤です。しかしその重要性の割には、復活についての記事はまちまちです。マタイ福音書の復活の出来事が、あえてマルコ福音書と変更している点が4つあります。それは、①土曜日の日没後、②二人のマリアのみ、③喜んでキリストの復活を伝えた、④女性たちは直接復活者に出会い語りかけられる、です。ここから、私たちにとって何が救いとなるのかを共に考えたいと思います。

①「週の初めの日」(1 節)とは、私たちの暦で言えば「土曜日の日没に始まり日曜日の日没」のことです。マルコは週の初めの日の早朝としていますから、マタイはあえて現在の土曜日の夕方に移しています。おそらくマタイの教会は、礼拝を現在の土曜日の日没後に行っていたのでしょう。日没後の出来事とするとき、キリストの復活は天地創造という救いと結びつきます。「夕べがあり朝があった」という創世記から、一日の始まりは夕からでした。希望は昼ではなく夜に確かめられるものです。空の星が見られるのは夜です。神は希望を闇夜に与えます。その希望を胸にしまってわたしたちは昼間歩くのです。平日の日常を生きるのです。夜空を仰ぐ信を神は義と認められます。

②二人のマリアとすることによって、キリストの復活は出エジプトと結びつきます。マリアはミリアムという名前のギリシャ語風の読み方です。紅海を歩いて渡って逃げたあの夜、モーセの姉ミリアムは神を賛美し、そのリードに従ってイスラエルの民は神を礼拝・賛美しました。イスラエルの人々の家が一夜にして空になったように、イエスの墓は空となりました。「十字架につけられた方はここにおられない。復活なさったのだ。ほかの弟子たちに伝えなさい。あの方は死者の中から復活された」(5-7 節)。

③二人のマリアは大いに喜び、解放の福音を告げ知らせるために賛美歌を歌いながら夜の道を走ります。マタイ福音書のマリアたちは「大きな喜び」を持っているので、賛美によって自らの持つ恐れを克服しています(8 節)。歌には恐れを喜びに変える力があります。賛美歌というものは夜一人で小さく繰り返し口ずさむものです。

④彼女たちが夜の道をエルサレムへと走って戻っている時に、復活のイエスが現れます。新共同訳「おはよう」(9 節)と。この挨拶の直訳は「あなたたちは喜びなさい」です。「喜べ」から転じて、挨拶に用いられるようになった慣用表現です。「あなたたちは喜びなさい」は、新約全体で 11 回登場します。マタイにはこの箇所他に、5 章 12 節にだけ用いられています。それは迫害を受けた時に「喜べ」というイエスの命令です。不安に思う人々に、イエスは「喜べ、大いに喜べ」と語ります。28 章においては日没後の真っ暗闇に向かっていく情景の中で、「喜べ」と伝えているのです。そして女性たちはイエスの言葉を聞いて、イエスにすがりつきイエスを礼拝します。

私たちは先の見えにくい不安の中にいます。コロナが落ち着いても、経済的不安、精神的不安、恐れを強く持っています。そのような中でこそ、私たちは深い闇へと走りながら毎週着実に復活のイエスを礼拝できるのです。復活信仰とは夜明けを待つことではなく、闇の真っ只中で光を希望することです。それによって日常・生活・生命を得ることができると信じるからです。その希望が与えられたイースターの時を、みんなで喜びながら過ごしていきましょう。